

## P-062\*

## 精神運動発達遅滞を有する児が、溺水により陰圧性肺水腫をきたした1例

前橋赤十字病院<sup>1)</sup>、前橋赤十字病院小児科<sup>2)</sup>

○金子 知広<sup>1)</sup>、清水真理子<sup>2)</sup>、山本 順子<sup>2)</sup>、佐々木祐登<sup>2)</sup>、中嶋 幸人<sup>2)</sup>、諸田 隼<sup>2)</sup>、矢島 もも<sup>2)</sup>、八木 夏希<sup>2)</sup>、杉立 玲<sup>2)</sup>、安藤 桂衣<sup>2)</sup>、田中 健佑<sup>2)</sup>、溝口 史剛<sup>2)</sup>、松井 敦<sup>2)</sup>

【はじめに】日本での小児の溺水死は年間300~400人であり、そのうち40%強が家庭の浴槽で起こっている。今回はCornelia de Lange 症候群 (CdLS) の児が本人の膝下まで水を張った浴槽で溺水し、陰圧性肺水腫をきたした1例を経験した。

【症例】3歳6か月男児。在胎37週5日、2020gで出生。出生後にCdLSを疑われ遺伝子検査で確定診断された。定額4ヶ月返還り6ヶ月、ハイハイ1歳7ヶ月、つかまり立ち1歳11ヶ月、つたい歩き3歳、喃語3歳で獲得。自宅の浴槽に児の膝下まで水を張り遊ばせている中、母が1分ほど目を離した際に、浴槽内に仰向けになっているところを発見された。発見時は呼吸と体動なく、父によって胸骨圧迫された。救急隊接触時は自発呼吸及び自己心拍を認めず。搬入時、GCS:E4V2M6、体温:37.3℃、脈拍:150拍/分、呼吸数:50回/分、SpO<sub>2</sub>:95% (酸素3L/分)、身長81cm、体重8.3kg、喘鳴、網状皮斑を認めた。胸部X線検査では両側肺陰影を認め、胸部CT検査で両側肺野にびまん性のすりガラス陰影を認めた。溺水による陰圧性肺水腫と診断し、ICU入室し、保存的加療を行った。翌日には呼吸状態安定し、ICU退室とした。入院7日目に軽快退院となった。なお、入院6日目に頭部MRIを撮影し、低酸素性虚血性脳症を示唆する所見は認めなかった。

【考察】小児の入浴中の溺水は常に起こり得ることであり、自身の身長よりもはるかに浅い水深でも溺水しうる。溺水が起こりやすい状況や合併症について、文献的考察や当院での症例蓄積を交えて報告する。

## P-064

## 小児と成人の混合病棟における看護師の抱える思い

松山赤十字病院

○梶谷 奈央、野中 恵、深川 幸恵、阪田 千春、廣瀬 陽子

【はじめに】少子化による小児と成人の混合病棟(以下、混合病棟とする)化が進む中、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、A病棟では病棟再編成により半数のスタッフが小児看護未経験の看護師で構成された混合病棟になった。混合病棟の看護師が抱える思いを明らかにし、今後の課題を抽出する。

【目的】混合病棟で勤務する看護師が抱えている思いを明らかにする。  
【研究方法】インタビューガイドに基づいて半構造化面接を行う。初期:病棟再編成~1か月、中期:再編成1年、後期:再編成2年の期間に分けて研究目的に関する記述をコード化、類似するものをサブカテゴリとし、さらに内容が類似するものをカテゴリとした。

【倫理的配慮】A病院医療倫理委員会の承認を得た。  
【結果および考察】小児経験看護師7名、未経験看護師13名にインタビューを実施した。小児経験看護師の初期は(小児病棟縮小への悲嘆)(漠然とした不安)、中期は(スタッフ間の関係形成困難さ)(理想の看護を提供できないジレンマ)、後期は(意識の変容による協働体制の芽生え)等のカテゴリで構成された。未経験看護師の初期は(混合病棟になる衝撃)(小児看護への漠然とした不安)、中期は(スタッフ間の関係形成への思い)(小児看護への苦手意識)、後期は(小児看護に対する意識の変容)(小児看護を経験したことによる自己の成長の認識)(小児看護に対する拭いきれない不安)等のカテゴリで構成された。双方の看護師は、互いの成長や協働体制の構築によりやがて見出し、重症疾患、家族の関わりを通して意識の変容があった。未経験看護師が小児看護の特性を理解し、実践するためには多くの時間を要する。早期から協働体制を整え、互いの専門性を生かした看護提供体制を整えていくことが必要である。

## P-066

## 新生児育児指導のウェブ化による業務改善の効果

横浜市立みなと赤十字病院

○野口有希子、荻田 浩子、鈴木留美子、松田めぐみ

当院では入院中に育児指導を実施しているが、明確なマニュアルはなく、個人の力量や経験値に左右されている。また産後1か月健診までの育児相談は、助産師が24時間対応している。しかしスタッフ不足により電話相談に丁寧に対応する事が困難な場面が生じている。一方、小児科所属の看護師は乳児1か月健診時に同じ様な内容の不安を抱えている母親が多いと感じており、それに対し1か月健診よりもっと早い時期にアプローチできないかとジレンマを感じていた。近年の家族形態の多様化により核家族化は進み、ひとり親世帯や単身赴任家庭も増えている。また、コロナ禍では母子保健事業が中止され、病棟では集団指導の中止や、里帰りも出来ない中で母親は孤立しやすくなり、状況となった。様々な環境要因が重なり、母親は子育てにおける知識を得る場所や機会が少なく、不安を一人で抱えた母親が増えている様に感じている。坪井らは「子育てに関連する不安や負担、育児困難感が増強すると、産後うつ病の発症や乳幼児虐待の要因となることも指摘されている。」<sup>1)</sup>と述べている。よって育児指導に関する正しい情報は重要な意味をもつと考える。コロナ禍では様々な事業が感染対策の観点からウェブ化した。当院でも上記の背景を踏まえ、効果的な育児指導を目指す事、医療者のジレンマ解消と業務改善を目的とし、一般的な育児指導内容を小児科医と検討した。そしてそれらをウェブ化する事で、母親のタイミングで正しい情報が手に入る事が出来るようになった。このツールを導入することで医療者の業務改善・ジレンマの解消に繋がる結果が得られたためにここに報告する。

1)坪井陽子、田中満由美、吉川友沙、他。産科における褥婦に対する退院指導の実態、母性衛生。2018.59(3):197-197.

## P-063\*

## 入院中から多職種連携の元で復学支援を行った多発外傷の一例

前橋赤十字病院

○加藤 雅子、中林 洋介、松井 敦、大館 美穂

【諸言】小児の入院患者の中には、治療を終えて退院後の生活に戻るために復学支援を必要とすることがある。復学支援では院内外の関係者による多職種カンファレンスを開催し、個別に対応を協議することが多い。今回、自殺企図を背景とした多発外傷の小児患者に復学支援を行ったので報告する。

【症例】14歳男児、中学校の校舎より転落し、当院にドクターヘリで搬送された。多発外傷の診断として、手術ならびにICUでの全身管理を実施し、第16病日に一般病棟に転床した。症例は以前より軽度の発達遅滞を指摘されていた。今回の受傷契機に自殺企図や本人の発達歴の関与が疑われたため、身体的治療の進行と並行して、復学に向けた院内外の関係者による多職種カンファレンスを実施した。心理的問題に対する家庭や学校、地域でのサポートを話し合う体制を構築して、第33病日に退院し、その後在籍校に復学を果たしている。

【考察】小児患者に対する復学支援は、本人の病状、退院後の本人家族の希望を元に、退院後の生活を見据えて、支援体制、学校との連携などを事前調整、対応協議することによって、学校生活に復帰しやすくすることを目標とする。今回は患者に精神的リスクが高いと思われるものの、その評価と対応がこれまで十分行われてこなかった。患者が安心して学校生活を送るためには、患者の評価を改めて行い、それを基に学校でも再度環境整備する必要があった。入院中から多職種カンファレンスを実施したことで、患者を主体とした復学支援について、計画段階から共に話し合うことが可能であった。

【結語】外傷を契機に入院した小児患者であっても、多職種連携を元にした復学支援は有用である。

## P-065\*

## 2023年季節性アレルギー性鼻炎(スギ花粉症)に対するオマリズマブの有効性

芳賀赤十字病院

○福田 暁子、菊池 豊、黒崎 雅典、齋藤 真理

【目的】12歳以上の重症季節性アレルギー性鼻炎(スギ花粉症)に対し、2019年からオマリズマブ投与が可能となった。スギ花粉飛散量はシーズン毎に大きく異なり、2023年は飛散量が多く重症化してオマリズマブ投与が必要となる症例を多く経験した。その有効性を検討すること。

【方法】オマリズマブ最適使用推進ガイドラインに基づき投与対象となった当院通院中のスギ花粉症患者を対象とした。ガイドラインに基づき2週または4週毎にオマリズマブを投与したが、投与毎にアレルギーチェックシートを用いて鼻症状、眼症状、QOLを評価した。最終投与時に治療アンケートを実施し、自覚的な有効性、不安、痛み、次年度への期待度を評価した。

【成績】対象は12歳から18歳の男児5名、女児2名。2週毎投与3名、4週毎投与4名。アレルギーチェックシート合計点、鼻症状は軽快し、特に2週毎投与症例で有効性を認めた。一方で眼症状、QOLは変化しなかった。治療アンケートでは、多くの症例で症状軽快を感じており、次年度への治療期待があった。注射剤であり、接種に対する不安や痛みを訴えた。

【結論】単一シーズンでの重症季節性アレルギー性鼻炎に対するオマリズマブの有効性を検討した。鼻症状に対する有効性を認め、特にスギ花粉感作が重症なほど有効となる印象があった。小児であっても皮下投与注射製剤は概ね受け入れられたが、不安や痛みに対する支援が必要である。

## P-067

## 当施設における固形癌に対する遺伝子パネル検査の現状

京都第一赤十字病院<sup>1)</sup>、京都第一赤十字病院 消化器内科<sup>2)</sup>、京都第一赤十字病院 病理診断科<sup>3)</sup>

○吉田寿一郎<sup>1,2)</sup>、塩津 伸介<sup>1)</sup>、内匠千恵子<sup>1)</sup>、浦田 洋二<sup>3)</sup>

【背景】遺伝子解析による Precision Oncology を目的としたがん遺伝子パネル検査が2019年より保険適応となり実臨床におけるがんゲノム医療の導入が進んでいる。がんゲノム医療連携病院である当施設での現状を報告する。

【方法】2020年1月から2023年6月までの期間に、当施設で固形癌に対し遺伝子パネル検査を施行した51症例について、病態の変異や転帰につき、後方視的に検討した。

【結果】年齢中央値64(32-81)歳、男性18例女性33例、癌腫は胃/大腸/胆道/膵臓/肺/乳腺/子宮/卵管/甲状腺/その他が7/12/7/6/2/6/4/1/2/4例であった。使用製品は46例でFundationOne CDxで、5例でFundationOne Liquid(FL)を用いた。使用機体は手術検体30例、生検検体16例、血液検体5例であった。50例(98.0%)で解析可能で、FLを用いた1例で解析不良のため検査中止となった。治療標的となるバリエーションは14例(28%)に指摘され、対象としてERBB2、BRAPV600E、BRCA2、NTRK3、NF1、FGFR1、SMARCA4、MAP2K1、ATMなどの遺伝子変異やTMB-Hが挙げられた。エキスポートパネルを総て13例(26%)で治療が提案でき、保険診療4例(8%)、臨床試験3例(6%)、患者申出療養4例(8%)、自費診療2例(4%)であったが、治療に到達した症例は保険診療2例、患者申出療養1例の計3例(6%)のみであった。治療に到達できなかった理由としては全身状態不良が3例と最多で、その他の理由としては自費診療、臨床試験適格基準外、遠方のため臨床試験不参加が挙げられた。生細胞系列変異を疑う二次的所見は8例(16%)で認められた。

【考察】治療到達例は存在するが少数であり、全身状態悪化で到達できない例も認められていることから、検査のタイミングなど治療到達率向上に向けたさらなる取り組みが必要である。